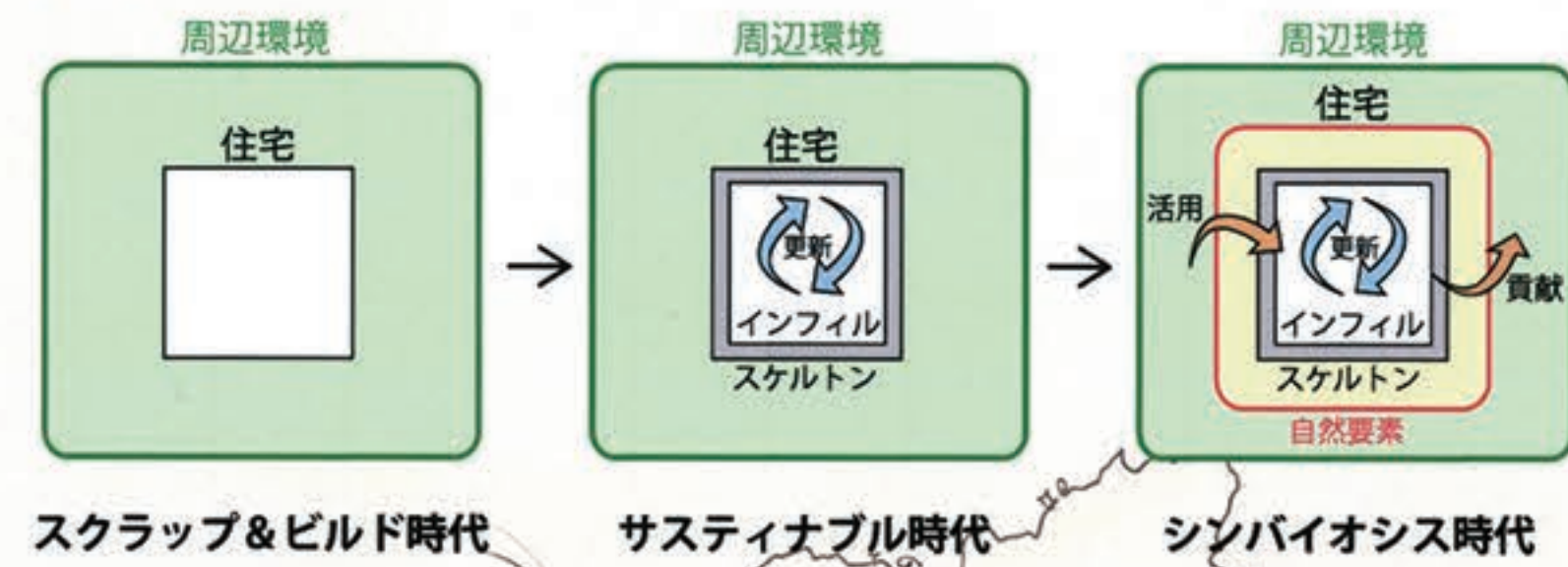


# 住宅が育てる住宅

住宅は、その機能を失えば建て直すスクラップ&ビルド時代を経て、耐用年数の異なるスケルトンとインフィルとを別で考えるSI住宅の考え方が生まれ、サステナブル時代となってきた。しかし、自然エネルギー利用は近年発展を見せているが、太陽光パネル、地熱利用などアクティブ利用に留まり、それは自然エネルギーを人間の使いやすいエネルギーに強制的に変えているに過ぎない。

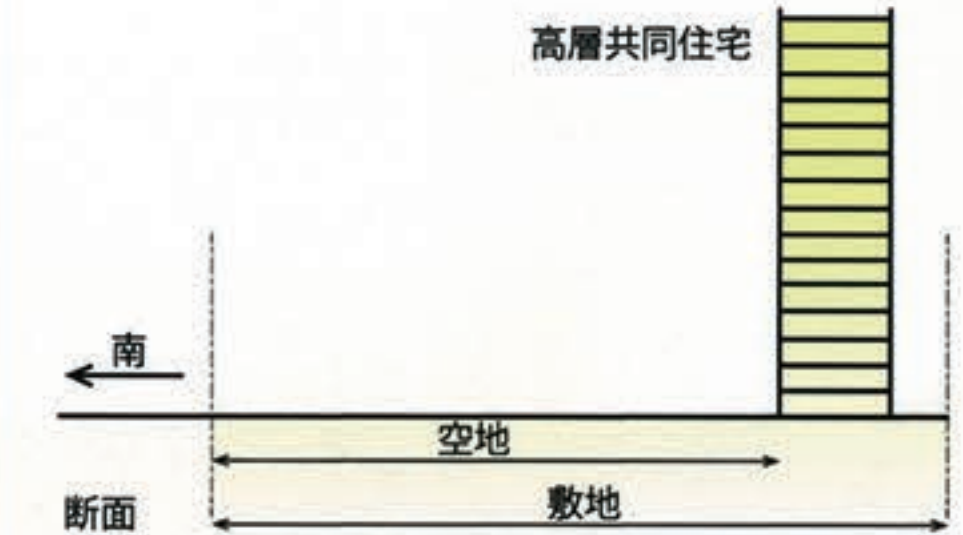
住宅が環境から断絶するツールである以上両者の関係はこれ以上改善されない。もし自然要素そのものを建築に取り込み、人が自然を活用し、貢献する関係が維持されれば環境との共生（Symbiosis シンバイオシス）する住宅となると考えた。そうなるためには住宅は、住民とともに成長し続け、自然と向き合い、常に過渡期であることが求められる。



## 想定する敷地

南前面に空地を残し高層集合住宅が建てられ人が住み始める。前面の空地の環境を住民自ら管理し育て、自然と共生できるセカンドハウスをつくる。

私の考える過渡期の住宅は、先に高層集合住宅が建設され住まうことから始まる。この前面空地の環境作りから始まる過渡期が、自然から学ぶ教育、住民間のコミュニティ、資産価値維持・向上にも繋がる重要な過程なのである。

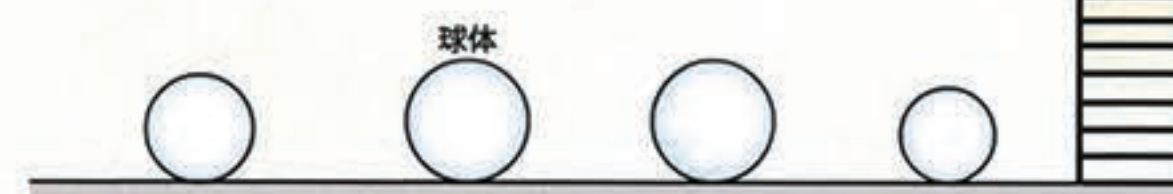


## 想定されるセカンドハウスの使われ方

- ・ 終の住まい
- ・ 日常の住まいに加えての別荘
- ・ 子・孫への住まい
- ・ マイオフィス・書斎

## 営みの流れ

1 ...0年  
雨水を貯水する球体が空地に配置される。



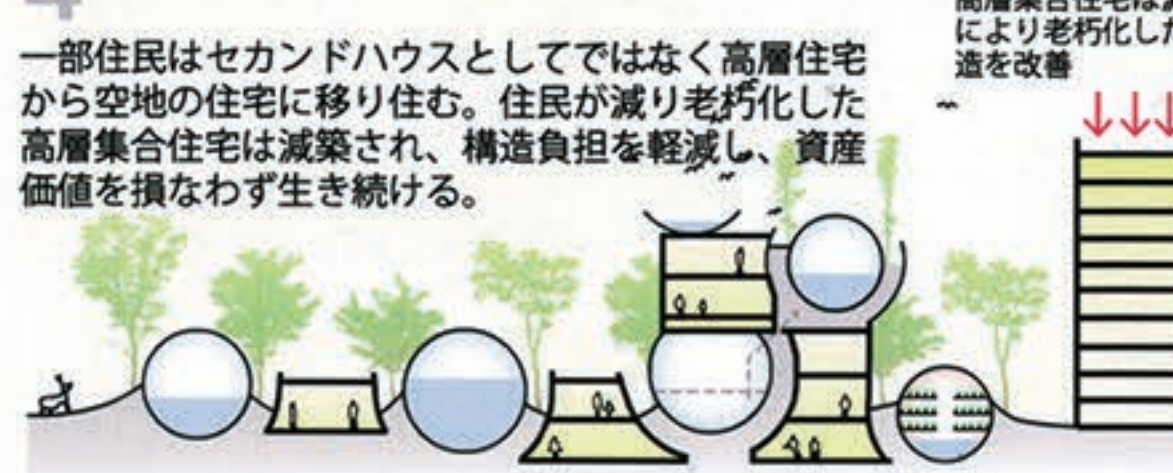
2 ...10年後



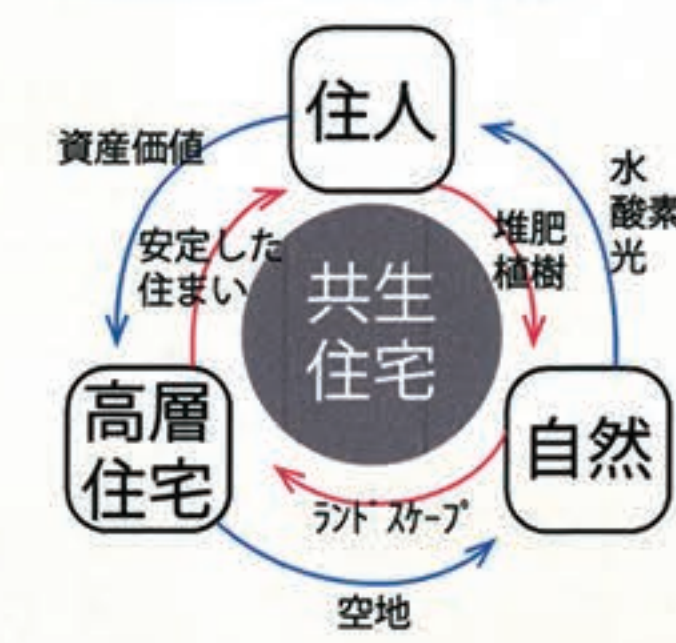
3 ...20年後



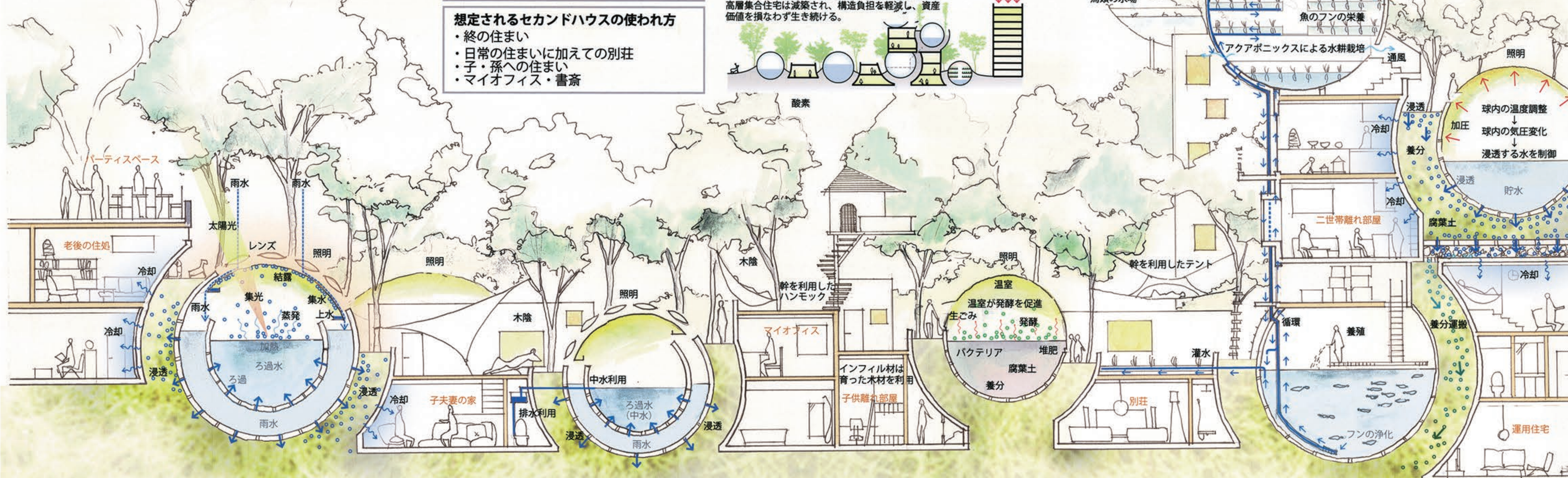
4 ...50年以降



## 共生住宅に必要な関係



この共生住宅が構築され続けるには「住人」「自然」「高層住宅」の相互の関係が成り立ち続けなければならない。



## 球体の使われ方

球体は様々な自然要素を建築に取り込むツールとして使われる。その使われ方は多岐にわたる。

